



アメリカ西海岸再訪時の菱木氏。アメリカン・ホンダ・モーターでは、新たなマシンの試験走行も一般道で行われた

単身渡米した時代の写真  
上/アメリカ南西部、モハーヴェ砂漠までのツーリング 中/フロリダ州、アメリカ最南端の都市キーウェストを疾走する菱木 下/西部劇の撮影場所となったことでも有名なモニュメント・バレーにて



「普通に筆記試験と面接を受けたんですよ。もちろん試験はすべて英語。日本で本田技術研究所に勤務していたことは、アドバンテージでもなんでもなかった」  
こうして菱木は、アメリカン・ホンダに入社。エンジニアとしてさまざまなバイクを走行テストし、問題点の洗い出しに奮闘した。  
「ゴールドウイングなどの大型バイクのテストで、とにかく長距離を走りましたよ。ウイロースプリングスにあるテストコースも使ったけれど、ほとんどが一般道。当時のネバダは速度制限がなかったから、テストには最適でした」



1600kmのロングツーリングの合間に、サンドウィッチ&デリに立ち寄る

レース参戦のための移動距離も日本では考えられないほど長い。全米選手権は文字どおり北米各地とカナダの一部を転戦する。フロリダのデイトナがよく知られているが、アラバマのタラデガ、ニューハンプシャーのロードン、ペンシルベニアのポcono、ノースカロライナ、そしてカリフォルニアと数千キロの移動を余儀なくされる。仕事の合間に、マシンの調整をはじめ移動までこなさなければならなかった。プライベートチームの菱木には、想像を絶する過酷な状況だったのである。「プライベートはやはり大変だった。レースに専念できる状況じゃなかったからな」と菱木自身も当時をふり返る。結局、渡米から2年を経た時点でレース活動は断念。だが、帰国はせずに、拠点をロサンゼルスへと移し、アメリカン・ホンダ・モーターの門をたたいた。

日本にいた時代と同様、仕事の合間を縫ってレースにも出場した。カリフォルニアの地方選手権である。「全米とちがって草レースみたいなものだったから。つねにトップクラスだったし、優勝もしましたよ」  
全米選手権で勝つという目標は絶たれたが、アメリカ国内のレースで確かに結果を残した。マイク菱木の名は、アメリカのバイクファンの記憶にしっかり刻まれたのである。そして85(昭和60)年3月、菱木は13年間に及んだアメリカでの生活に終止符を打つことになる。

Back to motorcycle life.  
マイク菱木の  
バイクライフ  
vol.4



Scene 4  
アメリカン・ホンダ・  
モーター

大きな夢を抱いて渡米。  
過酷な戦いに挫折を味わう

2009年、菱木氏は24年ぶりにアメリカ西海岸を訪れ、ホンダVT1300で約1600kmを走った

◆ 本田技術研究所のテストライダーとしての業務に忙しい日々を送る中、菱木はレース活動にも積極的に取り組んだ。1968(昭和43)年には全日本ロードレース選手権ジュニア251cc以上クラスでチャンピオンを獲得。さらに鈴鹿10時間耐久レースでも68年から70年まで3年連続でも優勝。国内ではまさに、順風満帆に頂点へと駆け上がった。そして、25歳の菱木は野望を抱く。  
「アメリカでレースがしたい！」  
71(昭和46)年11月、6年間勤めた本田技術研究所をあつさり退

世界に誇る名バイクであるホンダCB750FORの開発に携わり、草創期の鈴鹿耐久レースを席巻した伝説のレーサー菱木哲哉氏。その足跡をたどる連載第4回の舞台は、いよいよアメリカン・ホンダ・モーター時代である。



菱木 哲哉  
ひしき・てつや●1946(昭和21)年、千葉県生まれ。草創期の鈴鹿耐久レースに出場し、68年にCB450、69・70年にCB750で3連勝を飾る一方、テストドライバーとしてこれらのバイクの開発にも携わった。その後、単身アメリカに渡り「マイク菱木」として活躍。退職後は仲間とともにツーリングを中心にバイクライフを楽しむ。

社し、夢の実現のため単身、アメリカへと渡ったのである。  
知り合いのつてを頼ってペンシルベニアのバイクショップに身を寄せた。ここを拠点に全米選手権へ参戦するはずだった。しかし、待遇は決していいものではなく、とてもレースに挑める環境ではなかった。

このままではだめだと判断した菱木は、ニュージャージーへと移り、レース活動に熱心なバイクショップでメカニックとして働きながら、自らもレースを戦うことにしたのである。

マシンはCB750FORを使用。自らが開発に携わり、鈴鹿10耐で3連勝を果たしたバイクである。だが、国内レース時代とは、体制が違いすぎた。日本での実績など何の役にも立たない。2輪の内選手権としては世界でもっともハイレベルであった全米選手権の壁は、とてつもなく高かった。